
そうして彼女は眠りについた

木村よし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうして彼女は眠りについた

【Nコード】

N0039F

【作者名】

木村よし

【あらすじ】

9/11更新。いつも夢に見る幼い少女と黒いおじさん。寺脇泉はある夏の夜、友人たちと心霊スポットである廃校を訪れる。それから泉の運命はゆっくりと狂い初めて・・・

はじめり（前書き）

どうも。

木村よしです。

この作品を覗いてくださって本当にありがとうございます。

できればそのまま最後まで（笑）

これは木村よし初の本格的ホラー（目標）作品です。

ただこの話は二年ほどまえからずっと考えていて……。

それを上手く表現できるかはかなり不安ですが、よければ読んでください。

感想や批判など、よろしくお願いいたします。

それはどんなキツイものでも

木村よしの力になり励みになります。

では

本編のほうへ。

はじまり

目が眩むほど

眩しい夏だった。

『あのこはだあれ だれでしょね』

蝉が鳴いている。

被っている麦藁帽子がちくちくと少し気持ちが悪い。

その下では前髪が汗で額にべたりと張り付いていた。

一步。

また一步。

歩くたびに汗が滴り落ち、熱されたコンクリートに黒い点々を作っていく。

私は何故歩いているのだろう。

私は何処へ向かっているのだろう。

それさえも分からない。

目が眩むほど

眩しい夏だった。

『なんなんなつめのはなのした』

ぱふぱふとサンダルが鳴いている。

桃色の花が咲いた白いサンダル。

たまに吹く風に膨らむ水玉模様のワンピース。

肌触りは悪くなさそうだ。
白い生地に水色のドット柄。

暑い。

暑くてもうやめてしまいたい。

このまましゃがんで蒸発してしまいたい。

人魚姫は泡になった。

それなら私は、

雲にでもなろうか。

あの空に浮かんでいる入道雲は、もしかするとそんな人たちの集ま

りなのかもしれない。

雷が鳴り、雨が降る。

そうすると再び地上に舞い戻り目を覚ますんだ。

短くて儂い夢の終幕。

それでも

小さな手を握り締める。

小さな足を踏み出す。

一步。

また一步。

目が眩むほど

眩しい夏だった。

『おにんぎよさんと あそんでる』

「お嬢ちゃん。」

目の前に立つのは黒い男。

黒い帽子を被り
黒いＴシャツを着て
黒いズボンをはいている。
黒い
カラスのような男。

「お嬢ちゃん。」

男は帽子を脱ぐ。
少し薄くなつた頭が汗でてかっていた。
優しく笑うその目。
人のよさそうな口。
お父さんよりも
少しだけ年上だろうか。
お父さん。
私のお父さん。
誰のお父さん？
お父さんお父さんお父さん。

「お父さん。」

男がゆっくりと歩み寄ってくる。

一歩。

また一歩。

後ずさる小さな私。
私。

私と少女。

少女。

幼女。
幼い
小さな足。
小さな手。

『かわいいみよちゃんじゃないですか』

ねえ

あなたは誰。

あなたは

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

目を開ける。

煩く鳴る目覚まし時計を止めてゆっくりと体を起こした。

「はあはあはあ」

息が乱れている。

ものすごい汗でパジャマが体に張り付いていた。

いつもここで目を覚ます。

不思議な夢。

不可解な夢。

リアルで

感覚の残る

これは、夢。

いつも夢に出てくる幼い女の子と黒いおじさん。
あれは誰なのか。
見たことなんてない。
彼らのことなんて知らない。
なのに
それなのに。
何故か毎晩夢に現れる。
真夏のコンクリの上で。
同じ景色。
同じ熱気。
覚えたばかりの童謡。

『あのこはだあれ だれでしょね…』
これは
本当に夢？

「いーずーみ」

「紗代。おはよう。」

あと数分で予鈴が鳴る。
学校の駐輪場に自転車を止めた。
がちゃりと鍵をかける。

「泉、もちろん今夜行くよね？」

「あー。うん。行くよ。」

私の返事を聞いて嬉しそうに「やったあ」と喜ぶ紗代。
ルーズソックスに短いスカート。

ミルクティ色の髪は黒髪の私と対照的に眩しい。

「でもさあ、サヨはあんまりこういうの信じてないんだけどねえ。」

並んで歩く私と紗代。

紗代のポケットでジャラジャラと携帯のストラップが揺れている。

「紗代は単に信じるのが怖いだけでしょ。」

「ちがうもん！」

「違うない。」

「怖くなんか無いよ。お化けなんて、本当にいるわけないんだから。」

お化け。

幽霊。

心霊現象。

今夜、私たちは心霊スポットと呼ばれる、いわゆるゆイワク付きの場所へと行く予定なのだ。

それは電車で一駅いったところにある古い小学校で、今はもう廃校となっている場所だった。

「裕也たちだって面白半分、信じてなんて無いと思うよ。」

紗代は可笑しそうに目を細めて言った。

裕也。

孝明。

紗代。

そして私。

笹山裕也。

近藤孝明。

米倉紗代。

そして寺脇泉。

この四人が、今夜のメンバー！。

心霊スポットなんて、本当に信じている人は行かないと私は思う。

そのイベントを終えると、

何も無かったことに文句を言い

何も無かったことに安堵する。

世の中そんなものなのだ。

『あのこはだあれ』

「え？」

「泉？」

辺りを見回す。

数人の生徒が私たちと同様に校舎に向かって歩いている。

高校生。

幼さなんてない。

げらげらと笑う声。

もう大人。

大人ばかり。

「どうしたの？泉？」

「今、女の子の声が聞こえなかった？」

私の問いに紗代は不思議そうに首を傾げた。

「ううん。そんなの聞こえなかったけど。」

「そっか…」

予鈴がなった。

キンコンカーンコン。

少し歩く足を速くする。

あと五分で学校が始まるうとしている。

気のせいだろうか。

空耳だろうか。

確かに聞こえた気がした。

女の子の声。

幼い少女の歌声。

その歌の題名は知らない。

だけれど聞いたことがある。

どこで？

どこかで。

いつ？

いつだっただろう。

それはそんなに遠い記憶じゃない。

幻？

そもそも全てが幻だったのかもしれない。

だって。

思い出した。

だって。

そう。

それは、夢の中だったんだから。

懐中電灯の光が四つ。

たまに重なって三つになったり二つになったり。

照らし出された窓ガラスのほとんどが割られていて、壁には卑猥なラクガキ。

「誰かラジカセ変わってくれよ。」

後ろから孝明の声。

「うつせえな。ジャンケンで負けたお前が悪い。」

「孝明がんばれー」

廃校となった校舎の中は不気味というより汚かった。

床には割れたガラスやら色の変わったペットボトルなんか落ちていて、足場がいいとはとてもいえない。

「まじでラジカセ重いんだってえ」

孝明の悲痛な声に私たち三人は笑った。

ラジカセをもった孝明がどうやって懐中電灯までも持っているかは、後ろに彼がいるので分からない。

知りたいとも思わないので後ろを振り返ったりはしないけど。

ラジカセ。

どうして孝明がラジカセなんてもっているか。

それはこの心霊スポットにラジカセが欠かせないから。

そもそもこのイベントを企画したのは裕也だった。
どこかでこの廃校のことを聞いたらしい。
この廃校が心霊スポットなのだ。

この廃校から一駅いったところ、つまり私たちの学校の近くの山で
子どもの死体が見つかったらしい。
死体といっても、そこで見つかったのは頭と右足のみ。
ようするにバラバラ死体。

他のパーツはその近辺から見つかったようだけれど。

犯人はまだ捕まっていならしい。

見つからない。

見つからない。

鬼ごっこ？

かくれんぼ？

どこにいるか分からない。

どこにあるか分からない。

犯人。

殺人鬼と左手。

左手。

左の手。

頭、

胸、

腹、

右腕、

右手、

左腕、

子宮、

左足、

右足、

右目、
左目、
右耳、
左耳。

それらは全て発見されたようだけれど、
どうしても左手だけがまだ見つかっていないのだそうだ。
それは結構昔の話のようで、嘘か本当かも分からない。

その子どもの幽霊が

何故かこの廃校に出るといふ。

「ねえ、サヨ、トイレいきたい。」

紗代の一言で全員が一旦足を止める。

「え、まじかよ。あとちょっとでプールなのに。」

「トイレ行きたい！もう我慢できない！」

駄々をこねるように地団駄を踏む紗代に、どうするといふ風に顔を
見合す裕也と孝明。

「あー、いいよ。私もちょっと行きたいなって思ってたところだし
一緒に行こう。」

私は懐中電灯の光の先を見つめながら言った。

「わーい。泉超優しい！」

「だから裕也と孝明は先にプールに行つてて。」

私たちは暗い階段を上り、渡り廊下への扉の前で別れた。
女子トイレはその扉のすぐ横にあった。

男子トイレはその隣。

電気の送られていないこの建物の中は当然真っ暗で。

トイレの奥も例外ではない。

例外かどうかというよりも、そこは他の場所よりもずっと闇に包まれているような気さえする。

ぴちゃんぴちゃん。

トイレの中に入るとその音だけが静かに耳を刺激した。
闇が潜む。

しんと。

息を殺している。

何か

息を殺しているように。

私たちを待っているかのように。

「水は来てるみたいだね。」

ぼそりと紗代が言った。

懐中電灯がずっと奥にある窓を映し出す。

どうやらこの窓は割られていないようだった。

FUCK。

真っ赤なスプレーでそう書かれていたけれど。

卑猥なのか。

下劣なのか。

それとも哀愁なのか。

ぴちゃん。

もう一つの懐中電灯が奥から順々に個室を照らしていく。

一つ

一つ

一つ

一つ。

四つの個室。

全てが和式のような。

「さつさと済ませて裕也たちのもとに行こう。」

そう言ったのはどちらだったか。

紗代は奥から四つ目、つまり一番手前の個室に入った。

私は奥から二つ目の個室へ。

ぎい。

扉を閉める。

木製のそれは古いためか大分腐敗しているようだった。

蝶番も錆びている。

「いずみー？」

紗代の不安そうな声が聞こえた。

「大丈夫。ちゃんといるよ。」

私は、懐中電灯を足元に置かれていた青いポリバケツの上に置いた。
放置された汚物いれ。

変な臭いが鼻の奥をつく。

何の臭いなのだろう。

何かが腐った臭い。

悪臭。

腐乱臭。

気分が

悪くなる。

廃校になると全てが腐ってしまうのだろうか。

私は用を足して水を流すレバーを踏んだ。

ジャーと勢い良く水が流れる。

それでもやはり異臭は消えてくれなかった。

ぎいいいい。

ぎいいいい。

二つの扉がほぼ同時に開く。

「トイレって、どうしてこんなに不気味なのかな。」

「さあ。水周りはどうしても集まりやすいんじゃない。」

入り口の手前にある洗面所で手を洗う。

脇に挟んでいる懐中電灯の光が鏡に反射して、背後の壁も照らし出していた。

骸骨。

夜露死苦。

相合傘。

そのラクガキをぼおつと見つめた。

『あのこはだあれ』

「あのこはだあれ」

『だれでしょね』

「だれでしょね」

憶えたばかりの童謡。

夏。

眩しい夏。

暗い夜。

ひとりぼっち。

誰もいない。

お母さん。

お父さん。

怖いよ。

怖いよ。

ひとり。

ひとり。

あのこはだあれ

だれでしょね。

あのこはだあれ

だれでしょね。

あのこはだあれ

あのこはだあれ

あのこはだあれ

あのこは

あのこは

あのこは

助けて。

誰か。

誰か。

ここは何処。
憶えたばかりの童謡。
続きは何？
わからない。
あのこはだあれ
だれでしょね。
あのこはだあれ
あのこはだあれ

あなたは
だあれ。

ああああああああああああああああああああ
ああああああああああ

「いずみー?!」

いずみ。

泉。

私は泉。

何処か遠くで

紗代の呼ぶ声がした。

「…み、…ずみ…」

「…い、…きろ…おい！」

「…き、…っかり、寺脇！寺脇！」

ジージーと虫が鳴いていた。

舐めるように吹き抜けた風は、ねっとりとしぬるい。

今夜も熱帯夜のようにだ。

目を覚ますと

私はプールサイドに寝かされていた。

コンクリで作られていたそれは、ざらりと冷たかった。

「ん、私、」

「泉！よかった、目が覚めて！」

心配そうに覗き込んでいたのは紗代と裕也と孝明。

「ここは、私トイレにいたんじゃない…」

いまいち状況が飲み込めない。

トイレで用を足して。

水が流れる音。

錆びた蝶番。

腐った扉。

手を洗う。

鏡に反射する丸い光。

懐中電灯。
映し出される背後の壁。
らくがき。
卑猥、下劣、哀愁。
骸骨、夜露死苦、相合傘。
鏡越しに眺める私。
私。

そこから
記憶が無い。

「びっくりしたんだから。いきなり変な歌を歌いだして。」

「え？」

「それで気を失っちゃうんだもん。」

その時の紗代の悲鳴を聞いて、裕也と孝明が駆けつけたのだとか。

「変な歌って…？」

「やだ、憶えてないの？短くてサヨもすっかりとは思いつけな
いんだけど。なんだか童謡みたいだった。」

童謡。

どうしてだろう、思い出せない。
動揺。

思い出せない？
思い出したくないのかもしれない。
私は歌を歌ったのだろうか。

もうここまで出掛かっている。

咳をすればぼろりと出てきそうなくらい。

頭を軽く叩けば

ぱっと思いつき出しそうなのに。

何故だろう

全身がそれを拒否している。

拒絶。

根絶。

抵抗。

思い出してはいけない。

今は

思い出してはいけない。

「まあ無事寺脇が目を覚ましたんだからよかつたじゃねえかよ。」

「そうだけど。」

「なんか寺脇体調悪そうだし、もう帰るか。」

裕也が言った。

「え、ラジカセは？」

私は孝明の足元にあるラジカセを見た。

艶やかな表面は懐中電灯の光で、鈍く輝いているようだった。

カセットテープがセットされたラジカセ。

新しいカセットテープだった。

百均で買ったから多分十分ほどしか入らないだろう。

だけど今夜は十分もあれば充分だった。

この廃校のプールで
カセットテープのセットされたラジカセの録音ボタンを押す。

それがこの心霊スポットの醍醐味といえるらしい。
そうすると何かが録音されるらしいのだけれど、それも嘘かどうか
は勿論わからない。

「あー実はお前らがトイレ行ってる間に録音しちゃったんだよ。」
孝明がラジカセをポンポンと叩きながら話した。

「何それ！サヨも録音ボタン押したかった！」
「いやあ、やっぱり廃校って予想以上に気味が悪くてさ。さっさと
録音してさっさと帰りたかったんだ。」

ごめんな、と孝明は紗代の頭に手を乗せた。
紗代は仕方ないなあと唇を尖らす。
この二人、もうすぐデキアガルのではないかというのが、私の密かな
な予想。

「ねえ、もう今聞いちゃわない？それ」

紗代が言った。

「聞いちゃおうよ、今。どうせ虫の鳴き声以外は何も入ってないに
決まってるんだから。」

紗代は言い終わる前に孝明の足元のラジカセを引っ張ってきて、カ
セットの巻き戻しボタンを押した。
シャーという音が静かに響く。

いきなりの紗代の行動に、私たち三人はただただそれを見ている」としかできなかった。

カシャン。

テープが巻き戻った音。

紗代の指が再生ボタンに置かれる。

カチリ。

『ザ…ザザ…おい、ホントに何か』

裕也の声。

『しっ！…ザザ…もう録音始まってんだからな…ザザ…』

黙って聞き入る四人。

ラジカセからカセット独特の擦れた音が響く。

『ザザ…ザザ…ジージー…ザザ…ジージー…ザザ…』

孝明の声の後、虫の鳴き声以外は何も聞こえなくなった。

三分。

五分。

七分。

虫の鳴き声だけが聞こえる。

頭上からも。

ラジカセからも。

九分五十九秒。

ガシャン。

テープが止まった。

限界が来たのだ。

そのまま自動的に巻き戻しが始まる。

キュルキュルキュル…。

「なーんだ。やっぱり何も入ってないじゃない。」

文句のような安堵。

全員からふつと緊張の力が抜けたような気がした。

キュルキュルキュル…カシヤン。

「え？」

テープが止まった。

まだ全て巻き戻された訳ではない。

空気が変わる。

何かが張り詰める。

カセットは

勝手に回り始めた。

『ザザ…ザ…ぴちゃん…ザ…ぴちゃん…』

かすかに聞こえる

水の音。

さっきは入っていなかったはずの水の音。

『ザザ…水は来てるみたいだね…ザ…』

「え…」

紗代の息遣いが荒くなる。

『ザ…ザザ…さっさと済ませて裕也たちのところに行こう…ザザ…』

どうして。

これは何なのか。

血の気が引く。

血液が

体から消えていってしまふ。

鳥肌がたった。

ぶつぶつと。

それは不快以外の何者でもない。

『ザザ…ぎいいい…ザ…いずみ…ザザ…大丈夫、ザ、ちゃんといるよ…ザザ…』

それは間違いなくトイレでの私たちの会話。

ガシヤ。

そこで変な音。

『だ、だ、大丈夫…夫…ザザ…ちゃんと、いるよ…ザザ』

ガシヤ。

『だだだだだいじょうぶ…ザ…ちゃんとととと…いるよ…ザザ』

誰の声？

「うわあああああああああああああ！」

誰かが叫んだ。

違う、全員が叫んだのかもしれない。

廃校に響いたのは五人の悲鳴。

五人の奇声。

五人の叫び。

五人の

五人の。

一人二人三人四人。

五人。

ラジカセはそこに置き去りにした。

だから

途中からは四人の呼吸。

乱れた

四つのリズム。

校門をよじ登り外へと這い出る。

錆びた問は嫌な臭いがした。

血のような。

鉄の臭い。

「なんだったんだよ・・・いったい・・・」

裕也がボソリと呟いた。

息はまだ上がっている。

肩でリズムをとっているかのようだ。

はあはあはあはあ。

額から吹き出る汗は

決して暑いからではない。

校舎を見上げる。

暗い暗い廃校。

心霊スポット。

虫が鳴いている。

ジージー。

もう、あの奇声は聞こえては来なかった。

さまよう

チリリン。

風鈴が鳴る。

風鈴はその音色を聞いて風を感じるのだと小さい頃母に教わった。そうすることが納涼なのだ。

私は風鈴の音色が好きだ。あの軽やかな音はとても心地が良い。吹き抜ける風よりも

その音を感じるほうが好きだった。

「ねえ、泉。笑わないで聞いてほしいの。」

「笑わないよ。」

私の家の二階。

私の部屋。

学校の帰りに紗代が遊びに来ていた。

二人の前に置かれたグラスにはオレンジジュース。

それは空気中の水蒸気を引き寄せ、たくさん汗をかいていた。

「あの、あの夜から、おかしいの。」

「え？」

「廃校に行った、あの夜から。」

廃校に行ってから、もうすぐ一週間が経とうとしていた。

あの夜、私たちは行きと同じように電車に乗って帰った。

誰も何も話そうとはしなかったけれど。

ただ、不自然に明るいう電車で揺られていた。

ガタンゴトンガタンゴトン。

一駅分だけの短い間。

たしか二十三日を回っていたような気がする。

ぽつりぽつりと、乗客もほとんどいなかった。

いたのは、無駄にいちゃつくカップルと、大口を空けて寝ている酔っ払いくらい。

私たちはあの夜のことを、今まで一度も口にしていない。

どうしてかはわからない。

怖かったのか、思い出さなくなかったからなのか。

その両方かもしれないけれど。

私たちの中で、それが暗黙の規則となっていたのだ。

だけど。

今、紗代がそれを破ろうとしている。

「あのカセットテープ、どうなったんだらう。」

暗黙の規則。

知らない間に完成した決まりごと。

だからそれは、校則なんかよりずっとあやふやなもので。

それを破るのを咎めるなんてこと

私はもちろんしようとは思わなかった。

「だって、変だったじゃない。あんなこと、あるはずないんだもの。

ねえ、泉、どうしよう」

紗代がじっと私を見る。

その目の下には、よくみるとくつきりとクマができていた。

「サヨ、呪われているかもしれない。」

チリリン。

風鈴の音。

風がやさしく二人の頬を撫でた。

ぞくり。

何故か背筋に気持悪い感覚が走る。

「紗代、ごめん、どういふことかわからな」

「だって！だってだってだって！」

紗代の大きな声が響く。

「次の日から毎晩、かかってくるの。電話。携帯に。」

「電話？」

「夜の十時四十九分。毎晩きっちり同じ時間なの。一分も一秒も狂わず、全く同じ時間なの。」

コトんと、紗代がテーブルの上に携帯を置いた。

ジャラジャラと沢山付けられているストラップの大半が壊れていた。

「はじめは、変な悪戯電話かなって、だから気にする必要なんてないって、そう思ったの。けどもう今日で一週間だよ。一週間ずっと。もうサヨ、気味が悪くて。」

「ねえ紗代、それはどういふ電話なの？」

「・・・カセットテープ」

「え？」

「あのカセットテープに録音された音声が、そのまま流れるの。」

あの時の擦れた音が頭の中に蘇る。

キュルキュルとテープが巻き戻る音。

カシヤンと止まる。

再生ボタンは押していない。

勝手にテープが回りだす。

ぴちゃんぴちゃん。

紗代の声が聞こえる。

狂いだす私の声。

悲鳴にも似た歪な叫びが

今も耳から離れない。

「そのこと、誰か他に相談した？」

私は紗代の壊れたストラップを見つめたまま聞いた。

「孝明には、一昨日相談したの。だけど、全く聞こうとしてくれなくて。」

紗代の声が涙で震えだす。

「あの夜って言った瞬間に、もうやめろって。あの夜のこととは二度
と思い出したくないって。」

しょうもない男。
私は思った。

「サヨ、もうどうしたらいいかわかんない。怖い。すごく怖い。」

肩から指先にかけて両の手ががくがくと震えている。
細い腕。

少し強く握れば折れてしまいそうなほどだ。

「たすけて・・・」

弱弱しい声だった。

いつも楽しそうにしている紗代。

悩み事なんて、本当に何一つ無いんじゃないかって思うほど。
こんなに怯えている紗代なんて初めて見るかもしれない。

だから余計に

これは唯の狂言なんかじゃないのだと、
私は感じた。

「紗代の携帯って通話中に録音ってできるよね？」

紗代は私の問いかけにこくりと頷いた。

「もしも今日、また同じ電話がかかってきたら、それを録音して。
その後すぐに連絡してほしい。」

私の目を紗代が見つめる。

そして紗代の目を私が見つめる。

お互いの瞳に映し出された自分。

合わせ鏡。

何故かこのとき

そのような不思議な感覚に陥った。

「わかった。」

紗代が言った。

彼女の頬の涙はもう、

少し乾いていた。

「見て、あの子の手。」
「知ってる。気持悪いよね。」

私は、右手で左手をぎゅっと握るようにして隠した。それでも、クラスメイトの視線が左手に突き刺さる。まるで私の右手を通り越しているかのようだ。このままだと右手までもおかしくなってしまうそう。

見るな。
見るな見るな見るな。
私を。
私の左手を。
見るな。

「よかった、私の手は普通で。」
「しっ。聞こえるよ。」

そうだね、とクスリと二人の女子が笑った。
普通って何。
普通じゃないって何。
その境界線は、誰が決めるの？
あなたたちが普通で
私は異常。
それはどうして。
どうして

私が普通で

あなたたちが異常じゃないの？

私は膝の上で右手をそつと開いた。

私の左手。

異常な左手。

「だけど本当に、化け物みたいね。」

人は、自分と違うものを珍しがる。

珍しがつて

自分の幸福を喜ぶ。

皆。

みんな。

私の手を見て

自分の正常を喜ぶ。

常に向けられる好奇の目。

たまに向けられる同情の目。

見るな。

私を

私の左手を。

見るな。

見るな。

見るな。

ぱたりと

左手に雫が落ちる。

どうかお願い。

そんな目で、

私を見ないで。

『続いてのお便りはあ、ペンネームさくらんぼさん……』

ジャカジャカと明るいBGMが流れている。

パーソナリティーの声もちろん明るい。

「ん……」

私はゆっくりと体を起こした。

どうやら眠ってしまったようだ。

制服のスカートに変な皺がついている。

おかしい夢を見た。

どんなものだったかは全く思い出せないけれど。

疲れる。

精神的に。

悲しくなるくらい。

それは、

おかしい夢だったような気がする。

時計を見た。

時刻は夜の十時四十五分。

紗代が帰ったのが夜の七時ごろ。

かなり長い間寝てしまっていたようだ。

私はベッドから立ち上がると、部屋を出てリビングへと向かった。物音一つしない家の中。

昨日から両親は二人で祖父母のところへと行っている。

静寂だけが存在する。

不気味なほど。

時計の秒針の音が、酷く大きく感じた。

台所へ行き冷蔵庫を開ける。

ジーという音。

橙の光。

中にはお母さんが作っていつてくれたカレーの鍋が入っていた。

けれど私はミネラルウォーターの入ったペットボトルだけを取り出して、冷蔵庫の扉を閉める。

お腹が減っていなかった。

ただ

喉が渴いて仕方なかった。

蓋をあける。

三分の一ほど減った水は、

それでも美味しそうにゆらゆらと水面を揺らしていた。

ごくろり。

喉が鳴る。

冷たい感覚が喉から食道を駆け抜ける。

ごくろりごくろりごくろり。

体が冷えていく。

気持がいい。

チャンチャンチャチャチャン・・・

ペットボトルを口から放す。

かすかに聞こえる機械的なメロディ。

携帯の着メロ。

着信音。

私はペットボトルを近くのラックの上に置いて早足で部屋へ戻った。

クーラーのはいった涼しい部屋。

チャンチャンチャチャチャン・・・

まだ鳴り続けている携帯を急いで取った。

ディスプレイには紗代の名前。

嫌な予感がした。

とても。

とても嫌な予感。

チャンチャンチャチャチャン・・・

鳴り続ける携帯電話。

点滅する紗代の名前。

私は通話ボタンを押した。

「…もしもし、紗代？」

『泉！たすけて！』

叫ぶような紗代の声。

既に落ち着きを失っている。

「落ち着いて、紗代。どうしたの。」

私はゆっくりと聞いた。

私までも落ち着きを失くすのはまずいと思ったからだ。

『電話。電話がかかってきて。いつもと、違ったの。』

「違った？」

『この前のカセットには録音されてなかった、あの変な歌が、泉の歌ったあの変な歌が、』

はあはあはあ。

紗代の乱れた息が鼓膜を震わす。

かすかな空気の振動。

『だけど泉じゃなかった』

「どういうこと？わからない」

『あああ！』

「紗代？！」

鼓動がどくどくと速くなる。

『助けて、泉、もう、来てる、すぐそこまで、』

「来てるって何が、どうしたの、紗代！」

『駄目、もう駄目、いやだ、いやだよ、来ないで！来るな来るな来るな！』

錯乱状態。

狂ったような紗代の声。

何が起こっている。

わからない。

『ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい』

怖い。

それは私も同じ。

携帯を持つ手が震える。

ガクガクガクガク。

震える。

『泉、助けて、窓が、窓が、あああ！助けて、お願い、
震える。』

『死にたくない』

こくりと
喉が鳴った。

『ぎいあああああああああああああああああああああ
あああ！』

悲鳴。

奇声。

全てが
ぐちゃぐちゃになる。

「紗代?! さよ、さよ!」

ぴたりと静かになった電話。
プツリ、プープー!

私は着信履歴から裕也の番号を探し出す。
あった。

090から始まる携帯電話。
発信ボタンを押す。

プルルル、プルルル・・・
無機質な音が続く。

『もしもし、泉？』

裕也の声。

落ち着いた、何も知らない。

「今から、紗代の家に行くの。」

私は言った。

『は？今から？どうしたんだよ、いきなり』

「お願い、付き合っで。」

電源ボタンを押す。

ぶつりと電話が切れる。

返事は聞かなかった。

まだ制服のままの私。

皺のついたスカート。

時計を見る。

十時五十二分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0039f/>

そうして彼女は眠りについた

2010年10月8日12時58分発行